

島根県立大学 総合政策学会
『総合政策論叢』第24号抜刷
(2012年8月発行)

〈研究ノート〉

内容分析の手法を用いた
ライティング・ループリック具体化の試み

江口 真理子

<研究ノート>

内容分析の手法を用いた ライティング・ルーブリック具体化の試み

江 口 真理子

1. はじめに
2. 目的
3. 内容分析とルーブリック
 - (1)内容分析
 - (2)評価の信頼性
 - (3)評価の効率性
4. 内容分析を用いたライティング・ルーブリック
 - (1)ライティング評価の問題
 - (2)評価基準の細分化
 - (3)詳細なルーブリックの運用
 - (4)評価のフィードバック方法
5. 具体的ライティング・ルーブリックの有用性
 - (1)成績評価の客観性と効率性の向上
 - (2)学習内容の理解の向上
 - (3)学習意欲の向上
 - (4)評価内容と評価方法の妥当性の再考
6. まとめ

1. はじめに

大学教育のユニバーサル化とグローバルな競争を背景として、日本の高等教育に学習成果（ラーニング・アウトカム）の明確化が求められるようになってきている。平成20年12月に発表された中央教育審議会の答申「学士課程教育の構築に向けて」は、大学教育改革の具体的な方策として、学習成果を重視した大学改革を挙げ、「何を教えるか」ではなく、学生が「何を学んだか」を明確にすることを大学教育に要請している。しかし、現実的には、担当教員の経験に依拠して学習成果が評価されていることが多いのではないだろうか。

そこで期待が集まっているのは、ルーブリックを活用した学習成果の評価法である。「ルーブリック」とは「成功の度合いを示す数値的な尺度と、それぞれの尺度に見られる認識や行動の特徴を示した記述語からなる評価指標」（鈴木，2011）である。ルーブリックには成績評価の揺れを少なくし、不公平感を軽減する効果（Moskal & Leydens, 2000）や学習内容の理解を促進する効果（鈴木，2011）があると言われている。

しかし、ルーブリックが一般的な評価方法となっているとはいえない。その理由の一

つに、ルーブリックを作成することやルーブリックを使って評価することに時間と手間がかかることが挙げられる（和田，2006）。また、ルーブリックを使った評価は信頼性が低いという指摘もある（久留，大年，正木，金志，2011）。このような批判に対して、Bresciani et. al. (2009) は、ルーブリックの評価基準と行動の描写をより具体的にすることによって、ルーブリックの信頼性を向上させることを提案している。

2. 目的

そこで、本研究は、ルーブリックの信頼性と効率性を高めるために、具体的なルーブリックを作成し、それに基づいて学生のペーパーを評価する実践を通じて、その有用性を考察した。センテンスレベルの英文を書けるようになることを到達目標とするライティングの授業において、科学的なメッセージ分析技法である内容分析の技法を応用して作成したライティング・ルーブリックを用いて学生のペーパーを評価した。その過程における体験と観察を通じて、そのような具体的なルーブリックが、客観的な学習成果の公平な評価に役立つかどうか、効率的に学生のペーパーを採点できるかどうか、学生の学習に役に立つかどうかを検討した。

3. 内容分析とルーブリック

(1) 内容分析

「内容分析」はメッセージを量的に把握する分析技法である。クリッペンドルフ(2002)は内容分析を「データをもとにそこから（それが組み込まれた）文脈に関して再現可能で（replicable）かつ妥当な（valid）推論を行うための一つの調査技法」（p.21）と定義している。内容分析はマス・コミュニケーション研究で頻繁に使われる。一般的に、内容分析は、データをあらかじめ定義されたカテゴリー（評価基準）¹⁾に関して分析し、仮説を検証するというプロセスで行われる。分析者はコーダーと呼ばれ、データを解釈しながら、カテゴリーにあてはまる場合は1、あてはまらない場合は0を、または、頻度の数値を入力する。通常、複数のコーダーが同じデータを分析し、コーダー間の信頼性を保証する。一人のコーダーが時間を空けて同じデータを分析し、コーダー内での信頼性を確認する場合もある。内容分析の特徴は、データを変数に操作できるまでカテゴリーを詳細に定義することである。したがって、分析作業が単純化され、効率的に客観性の高い結果が得られるという利点がある。

(2) 評価の信頼性

このような特徴を持つ内容分析は学習成果の測定に活用することが可能である。内容分析の手法をルーブリックに応用することによって、今まで以上に正確に学生のペーパーを評価できると期待できる。学生のペーパーを採点するとき、一般的なルーブリックを使うと、観点毎の評価基準のスケールに解釈の幅があるために、AなのかBなのか、迷うことがよくある。しかし、内容分析では、カテゴリー（評価基準）が細分化され、データが1か0の変数に置き換えられるまで細かく定義されているため、評価するとき比較的迷わずに判断できる。

(3) 評価の効率性

信頼性が重要であることは言うまでもないが、効率性も重要である。評価にかかる労力の負荷は評価の信頼性を損なう原因となる。評価基準の揺れや大量のペーパーを採点する労力の問題について、Cho, Schunn & Wilson (2006) は次のように指摘している。

First, instructor ratings can have reliability problems because of shifting criteria over time as a large stack of papers are graded and a desire to rush the evaluation process when the stack of papers is large.

4. 内容分析を用いたライティング・ルーブリック

(1) ライティング評価の問題

ライティング能力を評価することは簡単ではない。私は「英語上級ライティング I」という 2 年生秋学期に配置された選択科目を担当しているが、学生のペーパーをどのように評価するかはいつも悩みの種である。

この科目の到達目標は「センテンスレベルの英文が書ける」という茫漠としたものである。「センテンス」とは「意味のあるまとまり」という意味であるが、ある単語の連なりに「意味」があると判断するのは、実は、センテンスではなく、そのセンテンスを書いた著者である。ただし、その単語の連なりが著者の元を離れ読者に解釈がゆだねられると、著者にとっては「センテンス」であったものが、読者にとっては「ただの単語の連なり」になってしまうことがよく起こる。本当に読者に意味が伝わる「センテンス」を書くためには、誰が読者で、その読者がどのような知識や経験をもっているかを知らなければならない。日本語を母語とする英語教師は日本語学習者の発想がわかるため、かなり文法におかしな単語の連なりでも「センテンス」と理解することができる。ところが、英語を母語とする者がそれを読んだ場合、「センテンス」であると認識されず、ただの単語の連なりに見えることがある。

換言すれば、学生が「センテンスレベルの英文が書ける」という到達目標を達成したかという判断は、一元的で絶対的な基準があるわけではなく、誰を読者に想定するかによって変化するものなのである。一度も出会ったこともないアメリカ人に向けて書くのか、いつも一緒に授業を受けている日本人のクラスメートに向けて書くのか等、誰に向けて書くかによって、意味が通じるかどうかがまったく異ってくる。

加えて、どのようなジャンルのセンテンスを書くかによっても「センテンスレベルの英文が書ける」という到達目標が変化する。かしこまった手紙か、くだけた携帯メールか、簡潔な報告書か、学術的な論文か等、ジャンルによって単語の連なりがセンテンスとしての意味を持つ度合いが変化する。このように「センテンスレベルの英文が書ける」という到達目標は、多様性を包含した非常に幅広い概念なのである。

(2) 評価基準の細分化

抽象的な概念を茫漠な評価基準で評価することは、妥当性と信頼性の観点から適切ではない。したがって、評価基準の細分化と評価基準の操作的定義が必要である。そこで、英語上級ライティング I という科目の到達目標である「センテンスレベルの英文が書ける」という概念を明確にする作業から取りかかった。

私が担当した英語上級ライティングⅠでは、読者像とジャンルを限定し、到達目標を北東アジアの大学で英語を第二外国語として学んでいる同世代の大学生を読者とし、日常的な出来事を報告する新聞記事のジャンルに用いられる「センテンス」が書けるようになることとした。言い換えれば、自分と同じような英語学習者が理解できるレベルの英文で日常的な出来事について新聞記事の報道スタイルで書けるようになることである。したがって、英文法の間違いがあっても大体の意味が分かる程度の英文になっていればよいものとした。本研究では、コミュニケーションの受け手とジャンルの限定を加えることで、到達目標である「センテンス」の意味を明確化した。

「センテンス」の意味を明確にした後、「英語のセンテンスが書ける」という大きな概念を、以下の4つの下位概念に分割し、この授業の到達目標とした。

- a) 英文法の知識を活用した英語のセンテンスが書ける
- b) 日常的な出来事を報告する事実伝達に適したセンテンスが書ける
- c) 北東アジアの大学生英語学習者を読者としたセンテンスが書ける
- d) 英文ワープロの基本に沿ったペーパー²⁾が書ける

学生のペーパーを評価するためにはこれらの下位概念をさらに細分化し、具体的に定義する必要がある。これらの概念は、まだ抽象度が高く、客観的で検証可能な評価基準にはなっていない。評価者が一人であったとしても学生のペーパーの数や前後によって評価基準が揺れる可能性が大きい。また、抽象度が高い評価基準は評価者が違うと異なる評価になる。また、抽象性の高い評価基準では学生にとってあまり役にたつものではないだろう。抽象名詞や形容詞は人によって意味が異なるからである。そのような多義的概念を評価基準とすることは、評価の信頼性を損なう原因となる。

この授業で用いたライティング・ルーブリックの評価基準は表1の通りである。

表1 ライティング・ルーブリックの評価基準

到達目標	下位の到達目標	評価基準	下位の評価基準	点数	
英語のセンテンスが書ける	英文法の知識を活用したセンテンスが書ける	S, V, Oのあるセンテンスが書いてある		1	
		形容詞を使って詳しく描写してある		1	
		副詞を使って詳しく描写してある		1	
		接続詞が正しく使っている		1	
		動名詞が正しく使っている		1	
		分詞が正しく使っている		1	
		直接語法が正しく使っている		1	
		間接語法が正しく使っている		1	
		関係代名詞が正しく使っている		1	
		同格が正しく使っている		1	
		句読法が正しく使っている		1	
		200語以上の英文が書いてある	200語以上書いてある		1
			語数が数えてある		1
		1センテンスが10語以上である		1	
		最近の自分のニュースが書いてある	自分の経験が書いてある		1
1か月以内の出来事が書いてある			1		

日常的な出来事を報告する事実伝達文が書ける	過去1ヶ月の出来事が書いてある		1	
	自分が見聞きしたことが書いてある		1	
	話題にニュース価値がある	話題に普遍性がある		1
		話題に新奇性がある		1
		話題に驚きの要素がある		1
	ヘッドラインが適切である	冠詞が省略してある		1
		ピリオドがない		1
		過去の出来事が現在形で書いてある		1
		短い単語が使われている		1
		場所が入っていない		1
		時が入っていない		1
	リードが適切である	Who, What, When, Where が書いてある		1
		絶対的な日付になっている		1
		一般的な普通名詞が使われている		1
		固有名詞には解説が入っている		1
		ヘッドラインとリードが相似形である		1
	ニュースソースがわかる	ニュースソースからの直接話法がある		1
		引用元が明記してある		1
	描写にリアリティがある	数字が入っている		1
		固有名詞が入っている		1
写真が入っている	オリジナルな写真である		1	
	写真を撮った人の名前がかいてある		1	
	jpeg形式の写真が添付されている		5	
	写真が魅力的である		1	
北東アジアの英語学習者とした書き方ができる	ヘッドラインに一般的な名詞が使われている		1	
	ローカルな情報には解説が入っている		1	
	日本文化の説明が入っている		1	
英文ワープロの基本に沿った英文が書ける	英文ワープロの基本事項がわかる	Times New Roman のフォントが使っている	1	
		文字が12ポイントになっている	1	
		マージンが3センチ	1	
		行間がダブルスペース	1	
		英数半角で書いてある	1	
		スペルが正しい	1	
		大文字の使い方が正しい	1	
		イタリックの使い方が正しい	1	
		スペースの使い方が正しい	1	
	5スペースのインデントがある	1		
	英文ペーパーの提出方法がわかる	氏名が正しく書いてある	1	
		学籍番号が正しく書いてある	1	
		課題番号が正しく書いてある	1	
		提出日が正しく書いてある	1	
締切日までに提出してある		1		
Microsoft WORD で書いてある	1			
指定された場所に提出してある	1			

(3) 詳細なルーブリックの運用

上記の評価基準はこの授業で使ったすべての評価基準のリストである。学生のペーパーを評価するときは、課題の内容に応じてこれらを組み合わせて用いた。すべての評価基準を用いて毎回のペーパーを評価したのではない。評価基準の数は授業が進行するにつれて増えた。ペーパーを書く上で重要な評価基準は、一回目のペーパーで使った後、二回目のペーパーでも使い、評価基準の理解の向上と評価基準に沿った学生の行動が定着するように留意した。具体的には、一回目のペーパーはもっとも基本的なポイントである「S, V, Oのあるセンテンスが書いてある」、「英文ワープロの基本事項がわかる」、「英文ペーパーの提出方法がわかる」等の評価基準について評価した。二回目のペーパーは、一回目の評価基準に加えて、「形容詞を使って詳しく描写してある」、「200語以上書いてある」、「語数が数えてある」、「自分の経験が書いてある」、「1か月以内の出来事が書いてある」等の評価基準³⁾について成績を評価した。もちろん、そのペーパーを出すまえに、評価基準について説明し、練習問題を行い、ペーパーのモデル文を提示しておいたことは言うまでもない。

(4) 評価のフィードバック方法

1) 紙ベースのフィードバック

学生にはペーパーを返却する際に、これらの評価基準毎の点数を記入した評価票を添付した。学生は金曜日にペーパーをオンラインで提出し、教員は週末に採点し、月曜日の授業においてペーパーと評価票を返却した。表2は学生が受け取る評価票と採点のサンプルである。この学生は13の項目は達成できたが、4つの項目は達成できなかった。項目毎に点数が付けられているので、何を間違えてしまったかが分かるようになっている。

表2 評価票サンプル

英文ワープロの基本に沿った英文が書ける	英文ワープロの基本事項がわかる	Times New Roman のフォントが使っている	1
		文字が12ポイントになっている	0
		マージンが3センチ	1
		行間がダブルスペース	1
		英数半角で書いてある	1
		スペルが正しい	1
		大文字の使い方が正しい	1
		イタリックの使い方が正しい	0
		スペースの使い方が正しい	1
		5スペースのインデントがある	1
	英文ペーパーの提出方法がわかる	氏名が正しく書いてある	1
		学籍番号が正しく書いてある	1
		課題番号が正しく書いてある	1
		提出日が正しく書いてある	1
		締切日までに提出してある	0
		Microsoft WORD で書いてある	1
		指定された場所に提出してある	0
合計点		13	

2) オンラインのフィードバック

この科目の総合点は、Moodle の Assignment と Grades というモジュールを使って、オンラインで学生が即座に確認できるように設定した。

図1の Assignment と書いてある部分は Moodle 上のペーパーの提出先になっている。Assignment のリンクをクリックするとペーパーを提出できる。また、教員によるペーパーの採点が終わり、教員が点数を入力すると、学生は提出したペーパーが何点になっているかを確認することができる。学生には点数が電子メールで送られるようにした。確認できるのは、点数とコメントのみであり、評価票のような詳しい内容を載せることができない。

図1 Moodle の Assignment のイメージ

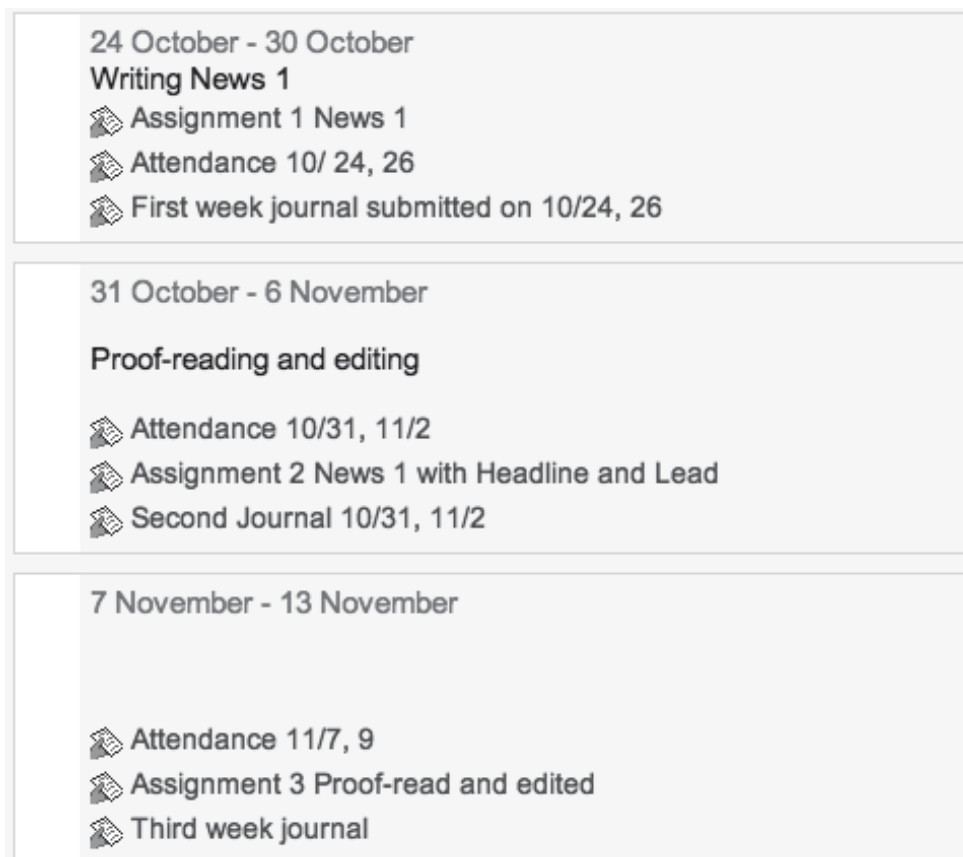


図2は Moodle の Grades モジュールのイメージである。Grades は学生毎に総合点を自動的に計算する機能である。それぞれのアクティビティのカテゴリーが全体に対して何パーセントの割合を占めるかを設定することによって、学生の総合点を自動で計算される。Assignment が個々のアクティビティの点数を表示するのに対して、Grades は総合点を表示できるので、科目の合格点に達しているかどうかを確認することができる。図2の場合、この学生は出席が68.75%、ジャーナルが33.33%、ペーパーの課題が65.08%で、最終的な成績は61.08%で、かろうじて合格点に達している。

Grades は学生にあまり利用されなかった。Assignment は電子メールによるプッシュ機能があるため、学生が確認する可能性が高くなるが、Grades にはそのような機能はなく、学生は自分で Moodle 上の Grades をクリックしなければならない。Grades の使い方について、授業内でデモンストレーションを行ったが、あまり使用していない様子であった。それがわかったのは、1月に Grades を学生毎にプリントアウトして配布した時であった。Grades の点数を見て、60点以下だった学生はペーパーの課題を次々に提出し、単位を落とさないように必死になった。1月の段階では不可が15人いたが、ペーパー提出ラッシュが起り、ほとんどの学生がこの科目に合格することができた。

図2 Moodle の Grades のイメージ

Grade Item	Grade	Range	Percentage	Feedback
Total				
Attendance				
Attendance 10/3 or 5	3.00	0.00-3.00	100.00 %	
Attendance 10/12 no class on Monday	3.00	0.00-3.00	100.00 %	
Attendance 10/17, 18	3.00	0.00-3.00	100.00 %	
Attendance 10/24, 26	0.00	0.00-3.00	0.00 %	absent
Attendance 10/31, 11/2	3.00	0.00-3.00	100.00 %	
Attendance 11/7, 9	3.00	0.00-3.00	100.00 %	
Attendance 11/14, 16	3.00	0.00-3.00	100.00 %	
Attendance 11/21	-	0.00-3.00	-	Holiday
Attendance 11/28, 30	0.00	0.00-3.00	0.00 %	
Attendance 12/12, 14	3.00	0.00-3.00	100.00 %	
Attendance 12/6	1.00	0.00-3.00	33.33 %	
Attendance 12/19, 20	3.00	0.00-3.00	100.00 %	
Attendance 1/11 Wed. Only	2.00	0.00-3.00	66.67 %	
Attendance 1/16, 18	0.00	0.00-3.00	0.00 %	
Attendance 1/24, 25	3.00	0.00-3.00	100.00 %	
Attendance 1/31, 2/1	3.00	0.00-3.00	100.00 %	
Attendance	13.75	0.00-30.00	82.75 %	
Journal				
First week journal submitted on 10/24, 26	0.00	0.00-6.00	0.00 %	Not turned in
Second Journal 10/31, 11/2	6.00	0.00-6.00	100.00 %	
Third week journal	6.00	0.00-6.00	100.00 %	
Journal 11/28, 30	0.00	0.00-6.00	0.00 %	
Journal 11/14, 16	0.00	0.00-6.00	0.00 %	
Journal 11/21	-	0.00-6.00	-	
Journal 12/5, 7	6.00	0.00-6.00	100.00 %	
Journal 12/12, 14	0.00	0.00-6.00	0.00 %	
Journal 12/19, 20	0.00	0.00-6.00	0.00 %	
Journal	18.00	0.00-30.00	32.33 %	
Assignment				
Assignment 1 News 1	19.00	0.00-20.00	95.00 %	Very good
Assignment 2 News 1 with Headline and Lead	0.00	0.00-25.00	0.00 %	
Assignment 3 Proof-read and edited	17.00	0.00-25.00	68.00 %	
Assignment 4 Final paper and picture	10.00	0.00-30.00	33.33 %	
Assignment 5 News 2	24.00	0.00-30.00	80.00 %	
Assignment 6	26.00	0.00-30.00	86.67 %	
Assignment 7 Final News 2 & Jpeg Picture	26.00	0.00-35.00	74.29 %	Thank you.
Assignment 8 Project draft	4.00	0.00-20.00	20.00 %	
Assignment 9 Project Final	20.00	0.00-35.00	57.14 %	
Assignment	32.00	0.00-50.00	65.69 %	
Course total	61.00 % (216.00)	0.00 % (0.00)-100.00 % (352.00)	61.09 %	

5. 具体的ライティング・ルーブリックの有用性

(1) 成績評価の客観性と効率性の向上

このライティングの授業におけるペーパーの評価に使用した詳細なライティング・ルーブリックは、信頼性と効率性という観点から、有用な評価方法であったという印象を抱いた。私は学生一人の200語程度のペーパーをかなり正確に評価できたと自負している。抽象的概念を多く含む評価基準からなるルーブリックを使った評価を使っているときは、Aにすべきか、Bにすべきか、迷うことが多かった。しかし、今回使用したライティング・ルーブリックは評価基準が具体的な行動を定義しており、1か0の点数しかないため⁴⁾、どちらにしようかと悩む必要はなく、自信をもって採点できた。本来なら、二人の評価者が評価を行い、二人の評価の一致度を調べるべきであるが、本研究は研究ノートなので、評価者間の一致度は次の研究の課題としたい。

また、この評価方法は時間を短縮できる評価方法であった。私は今まで学生のペーパーを毎週読み、評価することが苦痛であったが、この方法を採用してから、チェックのポイントだけをチェックすればよいとため、一人あたり数分でチェックできるようになった。毎週、40人程度のペーパーを採点するが、2時間程度で終わるようになった。効率性の向上はルーブリックの使いやすさを高めるものである。

(2) 学習内容の理解の向上

ペーパーの返却時に詳しい評価基準が明記してある評価票を添付することは、学習内容の理解の向上に役立ったと思われる。学生たちは、ペーパーと評価票が返却される時、ペーパーと評価票をよく見ている様子が観察された。例年より多い学生が研究室に評価票に記載された評価基準と自分の書いたペーパーについて質問に来た。学生とのやり取りを通じて、学生は関係代名詞や分詞の使い方などについて理解を深めている様子を観察することができた。ただし、本研究は学習効果を検証することを目的としていないため、理解が向上したかどうかを正確に判定することはできない。

(3) 学習意欲の向上

評価票の添付は学習意欲の向上にも役立ったと思われる。ペーパーが返却されると、隣同士で評価票を見せ合う様子が観察され、成績に対する学生の関心の高さがわかった。満点をとった学生は満足の笑みを浮かべ、期待する点数が取れなかった学生はどこ部分の間違っていなかったら、もっといい点数であったかを悔しがることが観察できた。

(4) 評価内容と評価方法の妥当性の再考

具体的なライティング・ルーブリックの作成とそれに基づく評価は思わぬ収穫があった。それは、評価内容と評価方法のずれに気付いたことである。英語上級ライティングⅠの科目ではペーパーのほかに、出席とジャーナルも科目の総合評価の対象としていた。具体的なライティング・ルーブリックを作成し、それを用いて学生のペーパーを採点するという体験は、出席とジャーナルを評価することの意義を再検討するよい機会となった。

出席を評価対象とすることに賛否両論がある。出席を評価しない教員は学生が教室にただ座っているだけで点数をあげるのはおかしいと言う。それに対して、今まで私は出席す

ることに意義があると漠然と考えていたが、実は、出席の数は「積極的に学ぼうとする能力」の変数になることに気付いた。定時に着席していることは、学生が学習者として望ましい行動を備えていることの証なのである。「積極的に英語を学ぼうとする態度」という内容を評価するのであれば、出席を数えることを評価方法とすることが適切であることに、詳細なライティング・ルーブリックを使用する過程で気づいた。

英語上級ライティングⅠのもう一つの評価対象はジャーナルであったが、ジャーナルを課す理由を今まで深く考えたことはなかった。「継続して、ジャーナルを書けば、英語力が伸びるはず」程度に考えていた。ジャーナルの評価方法は、一回あたり100字以上の英文を週3回書けば、6点、2回で4点、1回で2点、0回で0点とするものであった。詳細なライティング・ルーブリックを使用する過程で、この測定方法はどのような学習内容を測定しているのだろうかという疑問が湧き上がってきた。英語力を測定するには、時間内で書ける単語の数、語彙の豊かさ、文法の正しさを評価しなければならない。しかし、私はジャーナルを書いたかどうかだけに注目していた。実は、そのような評価方法は、英語力ではなく、「継続して英語の学習に向かう能力」を評価していたと気付いた。換言すれば、出席とジャーナルに関して、評価内容を十分に吟味していなかったため、妥当性のない評価方法を用いていたことを発見したのである。これは教師として大いに反省すべき点であった。

6. まとめ

本研究では、マス・コミュニケーション研究で用いられる「内容分析」の技法をライティング・ルーブリックに応用することによって、短時間に、かつ、客観的に学生のペーパーを評価する方法を考案し、そのライティング・ルーブリックの有用性を体験と観察を通じて考察した。ライティングの評価は手間がかかり、評価者内でも評価に揺れが生じるのが通常であるが、この方法を用いることにより、効率的にペーパーを評価することができた。また、この具体的な評価方法は学生の内容理解と学習意欲の向上に役立ったと観察した。さらに、このような評価方法を用いることは、評価内容と評価方法に整合性を持たせ、評価の妥当性を高めることにもつながるということを発見した。

しかし、本研究は内容分析をライティング・ルーブリックに応用した評価方法の試行であるため、この結果は暫定的なものである。評価方法が信頼できるものであるかどうかを判定するには、複数の評価者による評価の一致度を測定する必要がある。このような評価方法が学生の内容理解と学習意欲の向上に役立ったかどうかを判定するには、学生へのアンケート調査や別の方法による能力テストが必要である。これらは今後の研究課題としたい。

限定的な結果を提示するに留まる研究ではあるが、本研究は、二つの新しい点を提示することができたと思う。一つは、マス・コミュニケーション研究で伝統的に用いられてきた内容分析を教育評価に応用することで、内容分析の新しい領域を発見したことである。もう一つは、ルーブリックの評価基準を具体的に記述することによって学習成果を可視化することが可能であると示したことである。能力は抽象的で目に見えないものであるが、ある課題を達成するために用いる行動の集合体として、能力を捉えれば、能力を推察することが可能となる。確かに詳細なルーブリックを作成することは手間がかかる作業である

が、教師本人にとってもわかりやすい判断基準ができれば、採点しやすいだけでなく、学習内容と評価方法に整合性があるかどうかを判断することも容易となる。詳細で具体的な評価基準から成るルーブリックが使用されるようになれば、教育の質が向上するであろう。

注

- 1) 内容分析では「カテゴリー」、ルーブリックでは「評価基準」という異なる用語が用いられる。「カテゴリー」の方が「評価基準」よりも詳細に定義される。
- 2) 「ペーパー」は、英語で書かれた学生の提出物を指す。この授業では、1回の提出物は200単語程度の分量の英文であった。
- 3) ここに示した評価基準はレベルが低いと思われるだろうが、これが大学生の実態である。
- 4) 「jpeg形式の写真が添付されている」という評価基準は特に重要度が高かったため、添付されている場合は5点、そうでない場合は0点とした。

引用文献

- クラウス・クリッペンドルフ『メッセージ分析の技法』勁草書房(2002)
- 久留友紀子, 大年順子, 正木美知子, 金志佳代子「EFLライティング・ルーブリックの検証—授業での運用を通じて—」『JACET 関西支部ライティング指導研究会紀要』第9号, (2011) 13-24
- 鈴木雅之「ルーブリックの提示による評価基準・評価目的の教示が学習者に及ぼす影響—テスト観・動機づけ・学習方略に注目して—」『教育心理学研究』59, (2011) 131-143
- 田中博之「新しい評価Q&A」『CS研レポート』51号, (2004) 36-41
- 中央教育審議会大学分科会 制度・教育部会「学士課程教育の構築に向けて」2008年3月25日
Retrieved on March 11, 2012 from www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/.../007.pdf
- 和田智江「生徒の意欲を高める評価の研究—国語科授業における自己評価能力を育てる評価方法の開発—」 Retrieved on 2006 March 13 from www.kochinet.ed.jp/center/research_paper/H18.../10wada.pdf
- Andrade, Heidi & Du, Ying. (2005). Student perspectives on rubric-referenced assessment. *Practical Assessment, Research & Evaluation*. 10(3), 1-11.
- Bresciani, M. J., Oakleaf, M., Kolkhorst, F., Nabecker, C., Barlow, J., Duncan, K. & Hickmott, J. (2009). Examining design and inter-rater reliability of a rubric measuring research quality across multiple disciplines. *Practical Assessment, Research & Evaluation*. 14(12), 1-7.
- Cho, Kwangsu, Schunn, Christian D. & Wilson, Roy W. (2006). Validity and reliability of scaffolded peer assessment of writing from instructor and student perspectives. *Journal of Educational Psychology*. 98(4), 891-901.
- Moskal, Barbara M. & Leydens, Jon A. (2000). Scoring rubric development: validity and reliability. *Practical Assessment, Research & Evaluation*. 7(10).

キーワード：ライティング・ルーブリック 内容分析

(EGUCHI Mariko)

Creating Specific Rubrics for Writing English Sentences Using the Content Analysis

EGUCHI Mariko

This study explored the creation of specific rubrics for writing English sentences using the content analysis methodology, which is generally used in mass media studies. The author created simple and specific rubrics whose scales were coded either zero or one for an English writing course. The course's purpose is to help students be able to form acceptable English sentences. Then she used the specific rubrics to grade her students' papers and examined the benefit of the rubrics. It was found that the grading was both efficient and correct. The study suggested the need to investigate the effectiveness of the specific rubrics in light of students' learning and validity of the rubrics.